

博士論文（要約）

論文題目

朝清関係成立史の研究

—明清交替と朝鮮外交—

氏名

鈴

木

開

序論	5
----	---

第一部 後金国の成立と朝鮮国

第一章 光海君 12 年の燕行使李廷龜一行の交渉活動	21
はじめに	
第一節 徐光啓の「監護朝鮮」の説と李廷龜一行の派遣	23
第二節 李廷龜一行の外交交渉	32
おわりに	
第二章 光海君 13 年における鄭忠信の後金派遣	39
はじめに	
第一節 朝鮮と後金の外交交渉の開始	40
第二節 鄭忠信による外交交渉	46
第三節 鄭忠信派遣後の朝鮮と後金の関係	54
おわりに	
第三章 姜弘立の生涯	63
はじめに	
第一節 姜弘立の出自	63
第二節 政界における姜弘立	66
第三節 投降後の姜弘立	76
第四節 姜弘立の帰還	87
おわりに	

第二部 朝鮮・後金関係の展開（一）—信使と開市—

第四章 丁卯の乱と朝鮮・後金関係	97
はじめに	
第一節 仁祖 3 年の使者派遣	99
第二節 後金の朝鮮出兵の事情	103
第三節 丁卯の乱と兄弟関係	108
第四節 丁卯の乱の収束	119
おわりに	
第五章 朝鮮・後金間の使者往来：1627-1630	131
はじめに	
第一節 開市をめぐる双方の思惑—仁祖 5 年	133
第二節 義州、会寧における開市の始まり—仁祖 6 年	138
第三節 春秋信使派遣の開始—仁祖 7 年	153
第四節 定着する信使、難航する開市—仁祖 8 年	164
おわりに	
補論 回答使鄭文翼一行の後金における活動	174
はじめに	
一 鄭文翼の回答使任命	174
二 瀋陽までの旅程	176
三 「以金国回答使在瀋陽啓」と『続雜録』所収「啓辞」	178
四 「以金国回答使在瀋陽啓」と「啓辞」の史料価値	185
おわりに	
第六章 劉興治と朝鮮との関係について	194
はじめに	
第一節 劉興治と後金の関係	195
第二節 劉興治と朝鮮の関係	205
第三節 劉興治をめぐる朝鮮と後金の関係	212
第四節 劉興治の椴島執権期における朝鮮・椴島・後金間の経済関係	218
おわりに	

第三部 朝鮮・後金関係の展開（二）—歳幣と開市の行方—

第七章 『瀋陽往還日記』に現れた仁祖 9 年の朝鮮・後金関係	229
はじめに	
第一節 『瀋陽往還日記』の著者	230
第二節 『瀋陽往還日記』にみえる魏廷詰一行の活動	232
第三節 魏廷詰一行の国書伝達儀式	247
第四節 魏廷詰の後金観察	250
おわりに	
第八章 朝鮮・後金間の使者往来：1631-1633	256
はじめに	
第一節 礼物問題の始まりと贖還の再提起—仁祖 9 年	257
第二節 後金による関係改変の試み—仁祖 10 年	263
第三節 関係改変の動きに対する朝鮮の反発—仁祖 11 年	270
おわりに	
第九章 丙子の乱直前の朝清交渉：1634-1636	285
はじめに	
第一節 漠城における開市—仁祖 12 年	287
第二節 兄弟関係定着の兆し—仁祖 13 年	292
第三節 ホンタイジの皇帝即位と朝鮮の不満—仁祖 14 年	300
おわりに	

第四部 朝清関係の成立

第一〇章 丙子の乱と朝清関係の成立	317
はじめに	
第一節 丙子の乱における外交交渉の経過	320
第二節 定約条年貢論（南漠山詔諭）の意味	338
おわりに	
第十一章 朝清関係における朝鮮国王号の成立	358
はじめに	
第一節 スルハチ時代	359
第二節 ホンタイジ時代	360
第三節 「満文国史院檔」および「天聰九年檔」	365
おわりに	

結論	371
----	-----

【関連地図】

【別表 1】 朝鮮・後金（清）間の使者往来表：1627-1636

【別図】 漠城—瀋陽間の使者往来状況：1627-1636

【別表 2】 朝鮮・後金（清）間の国書形式：1627-1636

満洲・モンゴル人名対照一覧

初出一覧

参考文献

本論の内容は鈴木開『明清交替と朝鮮外交』（刀水書房、二〇二一年、ISBN978-4-88708-465-0）として刊行された。このため、インターネット公表は不可能である。

参考文献

史料（訳注、資料集を含む）

【朝鮮】

- 『雲壑先生文集』趙平（『影印評点韓国文集叢刊』続16）。
- 『荷潭破寂録』金時讓（『大東野乘』第十二、朝鮮古書刊行会、1911年）。
- 『漢陰文稿』李徳馨（『影印評点韓国文集叢刊』65）。
- 『凝川日録』朴鼎賢（『大東野乘』第八～十〈朝鮮古書刊行会、1910年〉）、
（李離和編『朝鮮党争関係資料集』4、驪江出版社、1984年）。
- 『錦南君関係文書』（国史編纂委員会所蔵MF）。
- 『愚伏先生文集』鄭經世（『影印標点韓国文集叢刊』68）。
- 『谿谷先生集』張維（『影印標点韓国文集叢刊』92）。
- 『経国大典』（学習院東洋文化研究所、1971年）。
- 『月沙先生集』李廷龜（『影印標点韓国文集叢刊』70）。
- 『光海君日記』太白山本（『朝鮮王朝実録』国史編纂委員会、1955～1958年）。
- 『光海朝日記』（『大東野乘』第八、朝鮮古書刊行会、1910年）、
（李離和編『朝鮮党争関係資料集』4、驪江出版社、1984年）。
- 『攷事撮要』魚淑權（京城帝国大学法文学部、1941年）。
- 『国朝人物志』安鍾和（明文堂、1984年）。
- 『混定編録』安邦俊（『大東野乘』第十二～十三、朝鮮古書刊行会、1911年）。
- 「柵中日録」李民寅（『紫巖集』（『影印標点韓国文集叢刊』82）所収）。
- 『事大文軌』（朝鮮史編修会編『朝鮮史料叢刊』第七、朝鮮総督府、1935年）。
- 『春坡堂日月録』李星齡（ソウル大学校奎章閣所蔵）。
- 『少為浦倡義録』（ソウル大学校奎章閣所蔵）。
- 『承政院日記』（国史編纂委員会、1961～1977年）。
- 『菁川日記』姜綆（『稗林』第六輯、探求堂、1969年）。
- 『松竹堂集』鄭文翼（『影印評点韓国文集叢刊』続17）。
- 「瀋行日記」李浚（『帰来亭遺稿』（国立中央図書館所蔵）所収）。
- 『晋山姜氏族譜』（国立中央図書館所蔵、肅宗11年刊）。

『晋州姜氏博士公派大同譜』（光一社、1994 年）。

『仁祖実録』（『朝鮮王朝実録』国史編纂委員会、1955～1958 年）。

『瀋陽往還日記』魏廷詰（申海鎮訳注、宝庫社、2014 年）。

『瀋陽状啓』（京城帝国大学法文学部、1935 年）。

『推案及鞠案』（亜細亜文化社、1984 年）。

「水使公入使瀋陽日記」宣若海（申海鎮編訳『瀋陽使行日記』宝庫社、2013 年）。

『清陰先生集』金尚憲（『影印評点韓国文集叢刊』77）。

『宣祖実録』（『朝鮮王朝実録』国史編纂委員会、1955～1958 年）。

『続雑録』趙慶男（『大東野乘』第五～七〈朝鮮古書刊行会、1910 年〉所収『乱中雑録』五～九）。

（民族文化推進会、1977 年）。

『沢堂先生別集』李植（『影印評点韓国文集叢刊』88）。

『竹溪日記』趙応禄（国史編纂委員会、1992 年）。

『忠勲府謄録』（保景文化社、1991 年）。

『朝鮮史料集真』第三輯、続、朝鮮史編修会編（朝鮮総督府、1935、1937 年）。

『鄭江西遺事』（ソウル大学校奎章閣所蔵）。

『同文彙考』（大韓民国文教部、国史編纂委員会、1978 年）。

『南漢解圍録』石之珩（ソウル大学校奎章閣所蔵）。

『南漢紀略』金尚憲（申海鎮訳注、博而精、2012 年）。

『南漢日記』石之珩（ソウル大学校奎章閣所蔵）。

「南漢日記」鄭之虎（『霧隱先生文集』〈韓国学中央研究院蔵書閣所蔵〉所収）。

『南漢日記』南磻（申海鎮訳注、宝庫社、2012 年）。

「南漢日記〈丙子〉」俞榮（『市南先生文集』〈『影印標点韓国文集叢刊』117〉別集所収）。

『南譜』（李離和編『朝鮮党争関係資料集』16、驪江出版社、1987 年）。

『燃藜室記述』李肯翊（朝鮮古書刊行会、1912～1913 年）。

『晩悔堂実記』（国立中央図書館所蔵）。

『晩雲集』鄭忠信（『影印評点韓国文集叢刊』83）。

『晩雲日記』鄭忠信（国史編纂委員会所蔵 MF）。

『備辺司謄録』（国史編纂委員会、1959～1960 年）。

「丙子南漢日記」李回宝（『石屏先生文集』〈『影印標点韓国文集叢刊』続 25〉所収）。

『丙子録』羅万甲（韓国学中央研究院蔵書閣所蔵）、
（高麗大学校所蔵）、
（国立中央図書館所蔵）、
（ソウル大学校奎章閣所蔵）ほか。

「北行日記」羅徳憲（『壯巖遺集』〈ソウル大学校奎章閣所蔵〉所収）。

『野言記略』吳淵（国史編纂委員会、2001年）。

『洛西集』張晩（『影印評点韓国文集叢刊』続15）。

『梨川相公使行日記』李弘胄（国立中央図書館所蔵）。

『李忠定公章疏』李貴（ソウル大学校奎章閣所蔵）

『吏文謄録』（韓国学中央研究院蔵書閣所蔵 MF）。

【清】

『愛新覺羅宗譜』（宗譜編纂処編、学苑出版社、1998年）。

『各項稿簿』（京都大学人文科学研究所所蔵青写真の複製）。

『旧満洲檔 天聰九年』1、2（東洋文庫清代史研究室訳注、東洋文庫、1972、1975年）。

『国朝史料零拾』（羅福頤編、旅順庫籍整理処、1934年）。

『清入関前与朝鮮往来国書彙編：1619－1643』（張存武、葉泉宏編、国史館、2000年）。

『盛京満文清軍戦報』『紙写檔案』（中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』14、中華書局、1990年）。

『世祖実録』（中華書局、1985年）。

『大清会典』（康熙29年、『近代中国史料叢刊』三編、文海出版社、1992年）。

『太宗実録』順治初纂・漢文本（張存武、葉泉宏編『清入関前与朝鮮往来国書彙編：1619－1643』所収、『内国史院満文档案訳註 崇徳二・三年分』所収）。
乾隆三修本（中華書局、1985年）。

「天聰五年八旗值月檔（二）」（中国第一歴史檔案館、『歴史檔案』2001-2、2001年4月）。

『朝鮮国来書簿』（京都大学人文科学研究所所蔵青写真の複製）。

『逃人檔』（加藤直人訳注、加藤直人『清代文書資料の研究』〈汲古書院、2016年〉所収、初出2007年）。

『土風録』顧雪亭（広陵書社、2003年）。

『内国史院檔 天聰七年』（東洋文庫清代史研究委員会、東洋文庫、2003年）。

『内国史院檔 天聰八年』(清朝滿洲語檔案史料の総合的研究チーム訳註、東洋文庫、2009年)。

『内国史院檔 天聰五年』I、II(清朝滿洲語檔案史料の総合的研究チーム訳註、東洋文庫、2011、2013年)。

『内国史院滿文档案訳註 崇徳二・三年分』(河内良弘、松香堂書店、2010年)。

『滿文原檔』(馮明珠主編、国立故宮博物院、2006年)。

『滿文老檔』(滿文老檔研究会訳註、東洋文庫、1955～1963年)。

『明清史料』(甲編、中央研究院歷史語言研究所、1930～1931年)。

『明清檔案存真選輯』(初集、李光涛編、中央研究院歷史語言研究所、1959年)。

【明】

『疑耀』張萱(『百部叢書集成』93、芸文印書館、1968年)。

『經遼疏牘』熊廷弼(沈雲竜輯『明清史料彙編』第二集、文海出版社、1967年)。

『国榷』談遷(古籍出版社、1958年)。

『三朝遼事实録』王在晋(江蘇省立国学図書館、1931年)。

『徐子庖言』徐光啓(上海市文物保管委員会主編『徐光啓著訳集』上海古籍出版、1983年)。

『神宗実録』(『明実録』中央研究院歷史語言研究所、1966年)。

『崇禎実録』(『明実録附録』中央研究院歷史語言研究所、1967年)。

『崇禎長編』(『明実録附録』中央研究院歷史語言研究所、1967年)。

『大明会典』(正徳4年、山根幸夫解題、汲古書院、1989年)。

(万暦15年、『元明史料叢編』第二集、文海出版社、1986年)。

『籌遼碩画』程開祐輯(『国立北平図書館善本叢書』第一集、1937年)。

『万暦邸鈔』(学生出版社、1968年)。

『万暦野獲編』沈徳符(『元明史料筆記叢刊』、中華書局、1959年)。

『辺事小紀』周文郁(広文書局、1969年)。

『明史』(中華書局、1974年)。

研究

【日文】

- 阿南惟敬「清初固山額真年表考」(同『清初軍事史論考』、初出 1967 年 9 月)。
- 『清初軍事史論考』(甲陽書房、1980 年)。
- 安部健夫「八旗満洲ニルの研究」(同『清代史の研究』創文社、1971 年、初出 1942 年 7 月、1951 年 3 月)
- 鮎貝房之進「市廛攷(四)(五)」(同『雜攷 姓氏攷及族制攷・市廛攷』国書刊行会、1973 年、初出 1943 年 4 月、5 月)。
- 今西春秋「清太宗の立太子問題」(『史学研究』7-1、広島史学研究会、1935 年 7 月)。
- 石橋崇雄「清初皇帝権の形成過程」(『東洋史研究』53-1、1994 年 6 月)。
- 「清初祭天儀礼考」(石橋秀雄編『清代中国の諸問題』山川出版社、1995 年)。
- 「マンジュ (manju, 満洲) 王朝論」(森正夫、野口鉄郎、浜島敦俊、岸本美緒、佐竹靖彦編『明清時代史の基本問題』汲古書院、1997 年)。
- 「清初入関前の無圈点満洲文檔案『先ゲンギェン=ハン賢行典例』をめぐって」(『東洋史研究』58-3、1999 年 12 月)。
- 『大清帝国への道』(講談社学術文庫、2011 年、原著 2000 年)。
- 石橋秀雄「清初のハン han」(『歴史と地理』453、山川出版社、1993 年 5 月)。
- 磯部淳史「清初における六部の設置とその意義」(同『清初皇帝政治の研究』風間書房、2016 年、初出 2010 年 12 月)。
- 市村瓊次郎「清朝国号考」(同『支那史研究』春秋社、1929 年、初出 1909 年 7 月)。
- 「各稿項簿に題す」(『史苑』2-1、1929 年 4 月)。
- 稲葉岩吉『清朝全史』上(早稲田大学出版部、1914 年)。
- 『満洲発達史』(大阪屋号書店、1915 年)。
- 「満鮮不可分の史的考察」(同『支那社会史研究』大鎧閣、1922 年、初出 1922 年 5 月)。
- 『光海君時代の満鮮関係』(大阪屋号書店、1933 年)。
- 「満鮮史体系の再認識」(同『増訂 満洲発達史』、初出 1933 年 11 月)。
- 『増訂 満洲発達史』(日本評論社、1935 年)。
- 井上直樹「日露戦争後の日本の大陸政策と「満鮮史」」(『洛北史学』8、2006 年 6 月)。
- 岩井茂樹「十六・十七世紀の中国辺境社会」(小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所、1996 年)。
- 「大清帝国と伝国の璽」(山本英史編『中国の虚像と実像』勉誠出版、2003 年)。
- 梅山直也「八旗蒙古の成立と清朝のモンゴル支配」(『社会文化史学』48、2006 年 3 月)。

——「ホンタイジによる左翼・右翼ジャルート＝モンゴル政略」(『社会文化史学』58、2015年3月)。

——「清初における八旗蒙古のニル構成と組織としての実態」(『社会文化史学』59、2016年3月)。

浦廉一「明末清初に於ける満・鮮・日関係の一考察」(『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』東洋史研究会、1950年)。

江嶋寿雄「天聰年間における朝鮮の歳幣」(同『明代清初の女直史研究』中国書店、1999年、初出1969年11月)。

——「崇徳年間における朝鮮の歳幣」(同『明代清初の女直史研究』、初出1972年8月)。

岡田英弘「清の太宗嗣立の事情」(同『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店、2010年、初出1972年)。

岡本さえ『近世中国の比較思想』(東京大学東洋文化研究所、2000年)。

鴛淵一「清初に於ける清鮮関係と三田渡の碑文(上)(中)(下の一)(下の二)」(『史林』13-1、13-2、13-3、13-4、1928年1月、4月、7月、10月)。

——「清初の八固山額真に就いて」(『山下先生還暦記念東洋史論文集』六盟館、1938年)。

——『満洲碑記考』(目黒書店、1943年)。

——「阿格多爾袞か阿濟格阿格か」(『滝川博士還暦記念論文集』(一)、中沢印刷、1957年)。

——「清鮮関係の一齣」(『東方学』27、1964年2月)。

——「朝鮮国来書簿の研究(一)(二)」(『遊牧社会史探究』33、36、1968年3月、11月)。

——「各項稿簿の研究(一)(二)」(『遊牧社会史探究』35、36、1968年11月)。

梶村秀樹「朝鮮思想史における「中国」との葛藤」(『梶村秀樹著作集』第二巻、明石書店、1993年、初出1968年)。

片岡一忠『中国官印制度研究』(東方書店、2008年)。

加藤直人「清初の文書記録と「逃人檔」」(同『清代文書資料の研究』汲古書院、2016年、初出2010年12月)。

金子祐樹「朝鮮跪拝技法論の発生とその背景」(『国際文化論集』32、桃山学院大学、2005年6月)。

川口卯橘「穩城梁景鴻等の陰謀事件」(『朝鮮史学』4、1926年4月)。

姜在彦『朝鮮儒教の二千年』(講談社学術文庫、2012年)。

神田信夫「清初の貝勒について」(同『清朝史論考』山川出版社、2005年、初出1958年3月)。

月)。

——「清初の文館について」(同『清朝史論考』、初出 1960 年 12 月)。

——「『満文老檔』に見える毛文竜等の書簡について」(同『清朝史論考』、初出 1966 年 1 月)。

——「満洲 (Manju) 国号考」(同『清朝史論考』、初出 1972 年)。

——「清初の漢軍武将石廷柱について」(同『清朝史論考』、初出 1986 年 2 月)。

——「孔有徳の後金への来帰」(同『清朝史論考』、初出 1997 年)。

岸本美緒「清朝とユーラシア」(歴史学研究会編『講座世界史 2 近代世界への道』東京大学出版会、1995 年)。

——「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」(『岩波講座世界史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店、1998 年)。

木村可奈子「日本のキリスト教禁制による不審船転送要請と朝鮮の対清・対日関係」(『史学雑誌』124-1、2015 年 1 月)。

木村拓「一七世紀前半朝鮮の対日本外交の変容」(『史学雑誌』116-2、2007 年 12 月)。

楠木賢道『清初対モンゴル政策史の研究』(汲古書院、2009 年)。

丘凡真(金玄耿訳)「大清帝国の朝鮮認識と朝鮮の位相」(『中国史学』22、中国史学会、2012 年 10 月)。

桑野栄治「朝鮮明宗代の対明外交交渉」(『久留米大学文学部紀要』国際文化学科編 27、2010 年 3 月)。

——「朝鮮宣祖代の対明外交交渉」(『久留米大学文学部紀要』国際文化学科編 27)。

桜井俊郎「『本学指南』の歴史的 성격」(『人文学論集』15、大阪府立大学、1997 年 1 月)。

——「『本学指南』訳注稿(一)」(『歴史研究』36、大阪府立大学、1998 年 3 月)。

佐藤文俊『李自成』(山川世界史リブレット人、2015 年)。

篠原啓方「朝鮮王朝の茶礼」(西村昌也編『東アジアの茶飲文化と茶業』関西大学文化交渉学教育研究拠点、2011 年)。

シロコゴロフ(川久保悌郎、田中克己訳)『北方ツングースの社会構成』(岩波書店、1941 年)。

島田正郎『清朝蒙古例の研究』(創文社、1982 年)。

承雄傑「十七世紀中国における朝鮮族の移住と定住について」(『海南史学』50、2012 年 8 月)。

- 杉山清彦「清初八旗における最有力軍団」(『内陸アジア史研究』16、2001年3月)。
- 「清初八旗制下のマンジュ氏族」(細谷良夫編『清朝史研究の新たなる地平』山川出版社、2008年)。
- 「武臣と功臣のあいだで」(『明清史研究』5、明清史研究所、2009年4月)。
- 「マンジュ国から大清国へ」(『別冊環』16、2009年5月)。
- 「明代女真氏族から清代満洲旗人へ」(菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、2010年)。
- 『大清帝国の形成と八旗制』(名古屋大学出版会、2015年)。
- 鈴木開「丁応泰の変と朝鮮」(『朝鮮学報』219、2011年4月)。
- 鈴木真「清初におけるアバタイ系宗室」(『歴史人類』36、2008年3月)。
- 関根知良「清朝・ホンタイジの対アオハン＝モンゴル政策」(『社会文化史学』59、2016年3月)。
- 田川孝三「光海君の姜弘立に対する密旨問題に就て」(『京城帝大史学会報』1、1931年7月)。
- 『毛文竜と朝鮮との関係について』(彙文堂書店、1932年)。
- 「瀋獄問題について(上)」(『青丘学叢』17、1934年8月)。
- 「瀋館考」(『小田先生頌寿記念朝鮮論集』大阪屋号書店、1934年)。
- 「事大使行と其の紀行録」(『書物同好会冊子』8、1938年12月)。
- 「朝鮮の大陸使節とその紀行録」(『朝鮮行政』3-2、1939年2月)。
- 滝沢規起「稲葉岩吉と「満鮮史」」(山田賢編『中華世界と流動する民族』千葉大学大学院社会文化研究科、2003年)。
- 田代和生「寛永六年(仁祖七、一六二九)、対馬使節の朝鮮国『御上京之時毎日記』とその背景(一)～(三)」(『朝鮮学報』96、98、101、1980年7月、1981年1月、10月)。
- 田中克己「アイタの伝記」(『東洋大学紀要』12、1958年2月)。
- 「通訳グルマフン」(『石浜先生古稀記念東洋学論叢』石浜先生古稀記念会、1958年)。
- 「清鮮間の兀良哈(ワルカ)問題」(『史苑』20-2、1959年12月)。
- 田中宏己「蒙古二旗成立考」(『軍事史学』6-4、1971年2月)。
- 谷井俊仁「清朝皇帝における対面接触の問題」(笠谷和比古編『公家と武家Ⅲ 王権と儀礼の比較文明史的考察』思文閣出版、2006年)。
- 谷井陽子「清朝漢地征服考」(小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究

所、1996 年)。

——「清朝入関以前のハン権力と官位 (hergen) 制」(同『八旗制度の研究』京都大学学術出版会、2015 年、初出 2004 年)。

——『八旗制度の研究』(京都大学学術出版会、2015 年)。

曹永祿 (渡昌弘訳)『明代政治史研究』(汲古書院、2003 年)。

月脚達彦『福沢諭吉と朝鮮問題』(東京大学出版会、2015 年)。

辻大和「一七世紀初頭朝鮮の対明貿易」(『東洋学報』96-1、2014 年 6 月)。

——「朝鮮の対後金貿易政策」(川原秀城編『朝鮮朝後期の社会と思想』勉誠出版、2015 年)。

——「丙子の乱後朝鮮の対清貿易について」(『内陸アジア史研究』30、2015 年 3 月)。

恒屋盛服『朝鮮開化史』(博文館、1901 年)。

寺内威太郎「慶源開市と琿春」(『東方学』70、1985 年 7 月)。

——「十七世紀前半の朝中関係の一齣」(『駿台史学』96、1996 年 1 月)。

——「『満鮮史』研究と稲葉岩吉」(同編『植民地主義と歴史学』刀水書房、2004 年)。

——「沈器遠の反乱と朝中関係」(『駿台史学』133、2008 年 3 月)。

——「朝鮮仁祖朝における贖還問題の一側面」(『駿台史学』151、2014 年 3 月)。

戸田茂喜「清太祖の都城遷移問題 (一) ～ (四)」(『史学研究』8-3、9-2、10-1、10-2、広島史学研究会、1937 年 8 月、12 月、1938 年 7、12 月)。

内藤虎次郎「奉天宮殿にて見たる図書」(『内藤湖南全集』第十二卷、筑摩書房、1970 年、初出 1906 年 6 月)。

——『韓国東北疆界攷略』(『内藤湖南全集』第六卷、1972 年)。

——「清朝開国期の史料」(『内藤湖南全集』第七卷、1970 年、初出 1912 年 11 月)。

——「清朝初期の継嗣問題」(『内藤湖南全集』第七卷、初出 1922 年 1 月)。

——「焼失せる蒙満文蔵経」(『内藤湖南全集』第七卷、初出 1924 年 6 月)。

——『清朝史通論』(『内藤湖南全集』第八卷、1969 年、初出 1944 年)。

中純夫「尹根寿と陸光祖」(『東洋史研究』67-3、2008 年 12 月)。

中村栄孝「清太宗の朝鮮征伐に関する古文書」(同『日鮮関係史の研究』下、吉川弘文館、1969 年、初出 1930 年 8 月)。

——「外交史上の徳川政権」(同『日鮮関係史の研究』下、初出 1968 年 5 月)。

名和悦子『内藤湖南の国境領土論再考』(汲古書院、2012 年)。

旗田巍『朝鮮史』(岩波全書、1951 年)。

- 『満鮮史』の虚像（同『日本人の朝鮮観』勁草書房、1969年、初出1964年）。
- 服部民夫「ネットワーク論の試み（Ⅰ）」（『アジア経済』32-6、1991年6月）。
- 林泰輔『朝鮮近世史』（吉川半七、1901年、1902年訂正再版）
- 日野開三郎「五代・北宋の歳幣・歳賜の推移」（『日野開三郎 東洋史学論集』第十卷、三一書房、1984年、初出1952年6月）。
- 福沢諭吉「支那朝鮮の関係」（『福沢諭吉全集』第八卷、岩波書店、1960年、初出1883年1月17～19日）。
- 夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』（名古屋大学出版会、2015年）。
- 細谷良夫「烏真超哈（八旗漢軍）の固山（旗）」（『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院、1994年）。
- 「明朝の武將尚可喜」（『東北大学東洋史論集』11、2007年3月）。
- 増井寛也「クルカ Kırka とクヤラ Kuyala」（『立命館文学』514、1989年12月）。
- 「満族ギョルチャ・ハラ考」（『立命館文学』544、1996年3月）。
- 「明末ワルカ部女直とその集団構造について」（『立命館文学』562、1999年11月）。
- 「清入関前の〈アゲ〉ageについて」（『立命館文学』582、2004年1月）。
- 「満洲〈アンダ〉anda 小考」（『立命館東洋史学』28、2005年7月）。
- 「〈太陽を食べる犬〉その他三則」（『立命館東洋史学』34、2011年7月）。
- 「天命後半期グサ別ニルの数量的考察」（『立命館東洋史学』38、2015年8月）。
- 松浦章『近世中国朝鮮交渉史の研究』（思文閣出版、2013年）。
- 松浦茂「天命年間の世職制度について」（『東洋史研究』42-4、1984年3月）。
- 「ヌルハチ（清・太祖）の徙民政策」（『東洋学報』67-3・4、1986年3月）。
- 『清の太祖ヌルハチ』（白帝社、1995年）。
- 『清朝のアムール政策と少数民族』（京都大学学術出版会、2006年）。
- 松村潤「順治初纂清太宗実録」（同『明清史論考』山川出版社、2008年、初出1973年）。
- 「天命朝の奏疏」（同『明清史論考』、初出1978年）。
- 「アミン＝ベイレの生涯」（同『明清史論考』、初出1981年3月）。
- 「天聰九年のチャハル征討をめぐる諸問題」（同『明清史論考』、初出1992年）。
- 三田村泰助「天命建元の年次に就て・（続）」（『東洋史研究』1-2、1-3、1935年12月、1936年2月）。
- 「清の太宗の即位事情とその君主権確立」（『東洋史研究』6-2、1941年4月）。

- 「再び清の太宗の即位事情に就いて」(『東洋史研究』7-1、1942年5月)。
- 「満文太祖老檔の編纂」(同『清朝前史の研究』、初出1950年)。
- 『清朝前史の研究』(東洋史研究会、1965年)。
- 森岡康「贖還被擄婦人の離異問題について」(『朝鮮学報』26、1963年1月)。
- 「丁卯の乱後に於ける贖還問題」(『朝鮮学報』32、1964年7月)。
- 「許博の疏文と贖還批判(上)(下)」(『朝鮮学報』37・38、39・40、1966年1月、4月)。
- 「大君陣」(『朝鮮学報』49、1968年10月)。
- 「第二次朝鮮入寇後の朝鮮人捕虜の売買」(『朝鮮学報』109、1983年10月)。
- 「第二次朝鮮入寇後の朝鮮人捕虜の売買」(『東洋学報』65-1・2、1984年1月)。
- 「朝鮮捕虜の清国の価格について」(『東洋学報』66-1・2・3・4、1985年3月)。
- 米谷均「文書様式論から見た一六世紀の日朝往復書契」(『九州史学』132、2002年3月)。
- 陸戦史研究普及会編『明と清の決戦』(原書房、1967年)。
- 渡辺修「己巳の役(一六二九—三〇)における清の対漢人統治と漢官」(『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院、1994年)。
- 綿貫哲郎「清初の旧漢人と八旗漢軍」(『史叢』67、日本大学史学会、2002年9月)。

【韓文】

- 桂勝範「光海君代末葉(1621~1622) 外交路線論争의 實際와 그 性格」(『歴史学報』193、2007年3月)。
- 「朝鮮特使의 後金訪問과 明秩序의 亀裂」(西江大東洋史学研究室編『韓中關係 2000年』ソナム、2008年)。
- 高潤洙「光海君代 朝鮮의 遼東政策과 朝鮮軍 捕虜」(『東方学志』123、延世大学校国学研究院、2004年1月)。
- 丘凡真、李在璟「丙子胡乱 当時 清軍의 構成과 規模」(『韓国文化』72、2015年12月)。
- 権仁溶「明末‘朝鮮監護論’에 대한 朝鮮의 認識」(『明清史研究』33、2010年4月)。
- 「明末‘朝鮮監護論’에 대한 朝鮮의 弁誣外交」(『明清史研究』35、2011年4月)。
- 権泰煥、慎鏞廈「朝鮮王朝時代 人口推定에 관한 一詩論」(『東亜文化』14、ソウル大学校東亜文化研究所、1977年12月)。
- 金世民「南漢山 法華寺와 楊古利」(『文化史学』38、韓国文化史学会、2012年12月)。

金声均「初期의 朝淸經濟關係交渉略考」(『史学研究』5、韓國史学会、1959年11月)。

——「朝金間犯越刷還問題応酬略考」(『史学研究』18、1964年9月)。

——「朝鮮中期의 対滿關係」(『白山學報』24、1978年6月)。

金盛祐『朝鮮中期 國家와 士族』(歷史批評社、2001年)。

——「戰爭과 繁榮」(『歷史批評』107、2014年5月)。

金駿錫「兩亂期의 國家再造 問題」(同『韓國 中世 儒教政治思想史論』Ⅱ、知識産業社、2005年、初出1998年6月)。

金容燮「朱子의 土地論과 朝鮮後期儒者」(同『新訂增補版 朝鮮後期農業史研究』〔Ⅱ〕知識産業社、2007年、初出1985年5月)。

金容欽『朝鮮後期 政治史 研究』Ⅰ(慧眼、2006年)。

金友哲『朝鮮後期 政治・社會 變動과 推鞠』(景仁文化社、2013年)。

金鍾洙『朝鮮後期 中央軍制研究』(慧眼、2003年)。

金鍾円「丁卯胡亂時의 後金의 出兵動機」(同『近世 東아시아關係史 研究』慧眼、1999年、初出1978年8月)。

——『近世 東아시아關係史 研究』(慧眼、1999年)。

裴祐晟『朝鮮과 中華』(トルベゲ、2014年)。

卞光錫『朝鮮後期 市廛商人 研究』(慧眼、2001年)。

徐台源『朝鮮後期 地方軍制研究』(慧眼、1999年)。

徐炳國『宣祖時代女直交渉史研究』(教文社、1970年)。

申海鎮「〈瀋陽往還日記〉의 著者 考証」(『韓國古典研究』29、2014年6月)。

沈勝求「朝鮮後期 무묘(武廟)의 創建과 향사(享祀)의 政治的 意味」(鄭萬朝、金海榮他『朝鮮時代의 政治와 制度』集文堂、2003年)。

吳洙彰「淸과 의 外交実相과 丙子胡亂」(同『朝鮮時代 政治、틀과 사람들』翰林大學校出版部、2010年、初出2005年2月)。

吳恒寧『光海君』(ノモブックス、2012年)。

禹景燮「滿洲로 歸化한 朝鮮人들」(仁荷大學校韓國學研究所編『범월犯越과 이산離散』仁荷大學校出版部、2010年)。

禹仁秀『朝鮮後期 山林勢力研究』(一潮閣、1999年)。

柳承宙『朝鮮時代 鉉業史研究』(高麗大學校出版部、1993年)。

——「仁祖의 丁卯胡亂 對策考」(『韓國人物史研究』3、2005年3月)。

柳在城『丙子胡乱史』(国防部戰史編纂委員會、1986年)。

李丙燾「光海君의 對後金 政策」(同『朝鮮時代の 儒學과 文化』韓國學術情報、2012年、初出1959年3月)。

李樹健『嶺南士林派의 形成』(嶺南大學校出版部、1979年)。

李章熙「丙子胡乱」(『韓國史』29、國史編纂委員會、1995年)。

——「丁卯・丙子胡乱時 義兵研究」(同『近世朝鮮史論攷』亜細亜文化社、2000年)。

李泰鎮「中央 五軍營制의 成立過程」(陸軍士官學校韓國軍事研究室『韓國軍制史 近世朝鮮後期篇』陸軍本部、1977年)。

——『朝鮮後期の 政治와 軍營制 變遷』(韓國研究院、1985年)。

李鉉淙「明使接待考」(『郷土서울』12、1961年11月)。

林基中『增補版 燕行錄研究』(一志社、2006年)。

——『燕行錄研究層位』(學古房、2014年)。

張禎洙「丙子胡乱時 朝鮮 勤王軍의 南漢山城 集結 試圖와 活動」(『韓國史論』173、2016年6月)。

張志連「光海君代 宮闕營建」(『韓國學報』86、一志社、1997年3月)。

全海宗「韓中 朝貢關係 概觀」(同『韓中關係史研究』、初出1966年10月)。

——「清代韓中朝貢關係綜考」(同『韓中關係史研究』、初出1966年12月)。

——「丁卯胡乱의 和平交渉에 대하여」(同『韓中關係史研究』、初出1967年5月)。

——『韓中關係史研究』(一潮閣、1970年)。

——「清代 韓・中關係의 一考察」(『東洋學』1、1971年10月)。

丁奎福、高憲植「〈山城日記〉의 文獻學的 研究」(『教育論叢』12、高麗大學校教育大學院、1982年12月)。

崔韶子「胡乱과 朝鮮의 對明・淸關係의 變遷」(同『明清時代 中・韓關係史研究』梨花女子大學校出版部、1997年、初出1975年9月)。

——「淸國과의 關係」(『韓國史』32、國史編纂委員會、1997年)。

滝沢規起「이나바 이와키稻葉 岩吉와 ‘만선사滿鮮史’」(『韓日關係史研究』19、2003年10月)。

Tony Michell (金惠貞訳)「朝鮮時代の 人口變動과 經濟史」(『釜山史學』17、1989年12月)。

河炫綱「李适」(同『韓國中世史論』新丘文化社、1989年、初出1965年)。

韓國人の 族譜編纂委員會編『韓國人の 族譜』（日新閣、1977 年）。

韓明基「光海君時代の 大北勢力과 政局의 動向」（『韓國史論』20、1988 年 11 月）。

——「暴君인가 賢君인가」（『歷史批評』44、1998 年 8 月）。

——『壬辰倭乱과 韓中關係』（歷史批評社、1999 年）。

——『光海君』（歷史批評社、2000 年）。

——「仁祖反正 以後 在朝北人에 대한 小考」（『崔承熙教授停年紀念論文集 朝鮮의 政治와 社会』集文堂、2002 年）。

——『丁卯・丙子胡乱과 東아시아』（プルンヨッサ、2009 年）。

——『歷史評說 丙子胡乱』1、2（プルンヨッサ、2013 年）。

許泰玖「丙子胡乱 講和 協商의 推移와 朝鮮의 対応」（『朝鮮時代史學報』52、2010 年 3 月）。

洪錫珠「光海君代의 慶德宮（慶熙宮）創建」（『서울學研究』34、2009 年 2 月）。

洪性鳩「国立中央図書館 所蔵 「清太宗詔諭」에 대하여」（『大丘史學』123、2016 年 5 月）。

【中文】

晁中辰「滿清入關前与李氏朝鮮的關係」（『韓國學論文集』4、北京大学韓國研究中心、1995 年 10 月）。

陳捷先「略論天聰年間後金与朝鮮的關係」（『東方學志』23・24、1980 年 2 月）。

——「清太祖時期滿洲与朝鮮關係考」（『金俊燁教授華甲紀念中國學論叢』1983 年）。

陳昱良「明人劉興治与朝鮮關係初探」（『滿學論叢』1、2011 年 11 月）。

杜家驥『清皇族与国政關係研究』（五南圖書出版、1998 年）。

黃一農「劉興治兄弟与明季東江海上防線的崩潰」（『漢學研究』20-1、2002 年 6 月）。

姜守鵬「劉興治的歸明与叛明」（『社会科学輯刊』1987-3、1987 年 6 月）。

李光濤「記崇禎四年南海島大捷」（同『明清檔案論文集』、初出 1948 年 1 月）。

——「論崇禎二年「己巳虜變」」（同『明清檔案論文集』、初出 1948 年 8 月）。

——『記明季朝鮮之「丁卯虜禍」与「丙子虜禍」』（中央研究院歷史語言研究所、1972 年）。

——『明清檔案論文集』（聯經出版事業公司、1986 年）。

李善洪「從十七世紀初朝鮮內外局勢看光海君的“兩端外交”」（『松遼學刊』〈社会科学版〉1996-1、1996 年 2 月）。

- 廖敏淑『清代中国的外政秩序』（中国大百科全书出版社、2012年）。
- 劉家駒「天聰元年阿敏等伐朝鮮之役与金国朝鮮兄弟之盟」（同『清朝初期的中韓關係』、初出1978年1月）。
- 「金国、朝鮮之建交与開市」（同『清朝初期的中韓關係』、初出1979年5月）。
- 「清初貿易於明朝与朝鮮間的潜商考」（『韓國學報』5、中華民國韓國研究会、1985年12月）。
- 『清朝初期的中韓關係』（文史哲出版社、1986年）。
- 「清太宗時代的朝鮮逃人問題」（楊聯陞、全漢昇、劉広京主編『陶希聖先生九秩榮慶祝壽論文集 国史積論』上冊、食貨出版社、1987年）。
- 「從朝鮮進金国的礼單与貢單分析兩國貿易的物貨（西元一六二七至一六四一年）」（『国史館館刊』復刊9、1990年12月）。
- 劉建新、劉景憲、郭成康「一六三七年明清皮島之戰」（『歷史档案』1982-3、1982年8月）。
- 劉為『清代中朝使者往来研究』（黑龍江教育出版社、2002年）。
- 孟森「關於劉愛塔事蹟之研究」（同『明清史論著集刊』續編、中華書局、1986年）。
- 石少穎「和約背後的制衡」（『歷史教学（下半月刊）』2012-7、2012年7月）。
- 「“丁卯之役”中金鮮間“納質”、“歲幣”問題由来考弁」（『中国史研究』2013-4、中国社会科学院歷史研究所、2013年4月）。
- 宋慧娟「1627 - 1636 年間後金（清）与朝鮮關係演变新探」（『東疆學刊』20-2、2003年4月）。
- 『清代中朝宗藩關係嬗变研究』（吉林大学出版社、2007年）。
- 宋慧娟、侯雅文「論後金与朝鮮“兄弟之盟”的性質」（『長春師範學院學報』22-2、2003年6月）。
- 王臻『朝鮮前期与明建州女直關係研究』（中国文史出版社、2005年）。
- 王志強「《金国汗黃台吉与海島劉興治等告天盟書》考」（『中国国家博物館館刊』2014-2、2014年2月）。
- 魏志江『中韓關係史研究』（中山大学出版社、2006年）。
- 魏志江、潘清「關於“丁卯胡乱”与清鮮初期交涉的幾箇問題」（『學習与探索』168、2007年1月）。
- 徐凱「朝鮮佐領考」（『韓國學論文集』7、北京大学韓國研究中心、1998年）。
- 「滿洲八旗中高麗士大夫家族」（『明清論叢』1、紫禁城出版社、1999年12月）。

- 「八旗滿洲旗分佐領內高麗姓氏」(『故宮博物院院刊』2000-5、2000年9月)。
- 徐望之『公牘通論』(商務印書館、1931年)。
- 張存武「清代韓中朝貢關係綜考」評介(『思與言』5-6、1968年3月)。
- 『清天聰時代後金汗國與朝鮮的關係』(國立台灣大學碩士論文、1970年)。
- 「清韓關係：一六三六—一六四四」(同『清代中韓關係論文集』台灣商務印書館、1987年、初出1972年12月)。
- 『清韓宗藩貿易 1637~1894』(中央研究院近代史研究所、1978年)。
- 「丁卯和議後金兵的撤退」(『東方學志』18、1978年6月)。
- 「清入關前與朝鮮的貿易：1627~1636」(『東方學志』21、1979年3月)。
- 張帆「明朝與朝鮮的關係」(王小甫他『中韓關係史(第2版·古代卷)』社會科學文獻出版社、2014年)。
- 趙興元『清代中朝關係研究』(吉林文史出版社、2006年)。
- 莊吉發「滿鮮通市考」(『食貨月刊』5-6、1975年9月)。
- 「從朝鮮史籍的記載看清初滿洲文書的繙訳」(『韓國學報』10、1991年5月、中華民國韓國研究會)。

【英文】

Seung B.Kye (桂勝範) *“In the Shadow of the Father: Court Opposition and the Reign of King Kwanghae in Early Seventeenth-Century Choson Korea”* Ph.Dissertaion
University of Washington, Seattle, 2006

論文の内容の要旨

論文題目 朝清関係成立史の研究

—明清交替と朝鮮外交—

氏 名 鈴木 開

16 世紀後半から 17 世紀後半、およそ一世紀に渡って起きた明から清への王朝交替は、その周辺諸国、諸勢力をも巻き込んで国際秩序の変動を引き起こし、周辺諸国、諸勢力もまた、それぞれにこの変動に対処していくこととなった。朝鮮国（朝鮮王朝：1392～1897、以下朝鮮）においてはこの時期、豊臣秀吉による朝鮮侵略からの復興に向けて、財政および軍政の再編が模索されていたが、光海君 8 年（1616）、ヘトゥ＝アラにおいて成立した後金国（アイシン＝グルン：1616～1636、以下後金）、さらにそれが発展して仁祖 14 年（1636）に成立する大清国（ダイチン＝グルン：1636～1912、以下清）から二度の侵略を被ることとなった。この侵略は朝鮮では丁卯の乱（1627）、丙子の乱（1636～1637）と呼ばれる。

従ってこの丁卯・丙子の乱は、先に述べた明清交替に伴う動乱が朝鮮において最も激しく表出した局面ということができ、特に丙子の乱においては、以降、清の滅亡まで続く朝鮮と清の関係の基本的な枠組みが形成されることになる。このため、17 世紀前半の朝鮮・後金関係、さらにそれを前提とする朝清関係の成立過程は、朝鮮王朝の対外関係のあり方を理解するために重要なテーマの一つである。さらにこのテーマは前近代東アジアにおける国際秩序として言及される冊封体制の象徴的事例としてしばしば取り上げられる朝鮮と清の関係を、実態に即して把握していく上でも意義深い。

しかしながら、朝鮮・後金関係、そしてそれを前提とする朝清関係の成立過程は、その重要性に比して本格的な検討の対象となつてこなかった。それは主として、稲葉岩吉氏がその

著書『光海君時代の満鮮関係』（1933）において提示した理解が具体的な検証を経ることなく長く踏襲されてきたことによる。稲葉氏の理解とは、第十五代朝鮮国王光海君（在位 1608～1623）の巧みな外交手腕によって朝鮮・後金関係は友好的に推移したものの、その光海君を廃位して王位に上った仁祖（在位 1623～1649）が親明的な政策をとったために両国の関係は敵対的となり、丁卯・丙子の乱が勃発したとするものであった。

そこで本論文では、この稲葉氏の説を検証するため、まず後金の成立を契機として行われた朝鮮の対明外交の局面を考察した。具体的には、光海君 11 年（1619）のサルフの敗戦を受けて展開された明の徐光啓による「監護朝鮮」の説に対する燕行使李廷龜一行の交渉活動を検討した。その結果、この交渉はサルフの戦い後の後金との交渉に関する明朝廷の疑惑を晴らし、後金とさらなる交渉を行う余地を生もうとする朝鮮朝廷の思惑によるものであり、そしてその思惑は成功したものと評価した。また後に軍事や外交といった局面で重要な役割を果たすことになる李廷龜がこの交渉活動を契機として政界に復帰したことから、この方面における光海君時代と仁祖時代の連続性を指摘した。

続いて、光海君時代の朝鮮と後金の関係という時、双方が最も接近したと考えられる鄭忠信の後金派遣を中心に両国関係の推移を検討し、鄭忠信派遣までは交渉の余地のあった両国の関係が、毛文竜の登場により悪化し、最終的にヌルハチが朝鮮使者を殺害して両国関係が断絶状態に至る過程を明らかにした。あわせて、『光海君時代の満鮮関係』と銘打ちながら鄭忠信派遣にほとんど言及せず、その後の両国関係の悪化についても論及しなかった稲葉岩吉氏の研究の問題点を指摘した。

こうした検討によって、稲葉氏が提示した光海君時代における朝鮮と後金の友好的な関係、仁祖時代における敵対的な関係という説明は実態をよく反映したものではなかったことが明らかになった。その上で本論文では、丁卯の乱、丙子の乱における朝鮮と後金（清）の外交交渉、そして二つの戦乱の戦間期の朝鮮・後金（清）関係を史料に即して跡付けた。

まず丁卯の乱では、戦乱に際して江華盟約と平壤盟約という二様の盟約が誓われ、朝鮮・後金交渉が本格的に開始されることになる。ただ、そうして成立した両国間の兄弟関係というものに明確な実態はなく、両国の関係は仁祖 6 年（1628）以降の交渉によって逐次整備されていったと考えられる。具体的には、仁祖 6 年 8 月の回答使鄭文翼一行の派遣に際して、義州と会寧における春秋二回の開市の実施が合意され、仁祖 7 年から春秋二回の信使の派遣と、それに伴う礼物の送付が開始された。また開市の合意の背景には、仁祖 6 年における後金と毛文竜の講和交渉の頓挫に対するホンタイジの危機感があったと推測される。

その後、仁祖 8 年の朝鮮・後金関係は椶島の劉興治勢力の盛衰と関連があったと考えられる。劉興治は後金と一時的に同盟するものの、最終的には明への帰順を画策して配下の女真人に殺害されたが、この過程で、後金が劉興治勢力から同盟の破棄を通告され、同勢力の瓦解によって明産の物資の取得が困難となり、それまで以上に朝鮮からの輸入に頼らざるをえなくなった。このことが仁祖 9 年の礼物問題などの背景になったと推測される。

これまで、朝鮮・後金関係悪化の契機として理解されていた仁祖 9 年の礼物問題であるが、これについては朝鮮使節魏廷詰による『瀋陽往還日記』が残存しており、この記述によってその経緯を明らかにすることができる。魏廷詰によれば、この時の礼物問題は魏廷詰一行が持参した礼物が受領されることで解決をみていたのであり、この時期の両国関係が殊更に悪化したとはいえないようである。

その後の礼物問題は次のような展開をたどる。すなわち、ホンタイジは仁祖 10 年 10 月にバドゥリ一行を派遣して一年一度、従来の十倍近い額数の礼物を送るよう要請し、朝鮮朝廷では翌年正月から 2 月にかけて征虜の議が起きるものの、4 月に派遣された春信使朴簠一行がこれに準じる礼物を送付した。このことによって、礼物問題は一応の決着をみたといえる。ホンタイジが仁祖 9 年 5 月に設置した六部のうち、礼部承政のバドゥリを派遣して礼物の増額を提案したのは、彼がこの問題を礼制に関わるものと認識していたことを示している。そのバドゥリが「兄弟の盟」を改め、「君臣の約」を結ぶべきであると述べたと考えられることは、ホンタイジの対朝鮮関係観の変化をうかがわせる。

そして仁祖 13 年 12 月、ホンタイジが皇帝即位に先立って「兄弟」である朝鮮に相談すべきであると述べたため、翌年 2 月にイングルダイ一行がもたらした後金およびモンゴルの諸バイレによる書簡の受け取りを朝鮮朝廷が拒否する事態となり、丙子の乱へと至る。ホンタイジは仁祖 14 年 10 月に朝鮮側訳官朴仁範に対して出兵停止の条件として「絶和」「斥和」の臣および王子の入質、「一年一度」の礼物、王室同士の婚姻を提示したが、ここには朝明関係の継承や兄弟関係から君臣関係への移行を企図したような条件はみられない。ホンタイジには朝明間の冊封関係を採用する考えはなく、自身が主導して統制を強めていたモンゴルとの関係を朝鮮との関係に持ち込もうとしていたふしがある。

そうして勃発した丙子の乱では当初、ホンタイジは遼、金、元と高麗の関係を引き合いに出兵の正統性を主張していたが、仁祖の降服直前である仁祖 15 年正月 28 日、朝鮮の降服条件として、そして以後の朝清関係の基本的性格を示すものとして下された定約条年貢諭（南漢山詔諭）において初めて朝明間の冊封関係を継承する意志を示す。この詔諭は、朝鮮

朝廷の要請によって急遽下されたものであり、全十ヶ条のうち朝明関係の継承を意図したと思われるのは二ヶ条にとどまるものであった。

仁祖 10 年正月からは前年の六部の設置、大凌河攻城戦を経て、ホンタイジー人が南面し、その前にダイシャン、マングルタイが左右向かい合って座るようになり、ハンであるホンタイジへの権力集中がより一層、進められた時期に当たる。とはいえ、その後の後金使者の接待問題、バドゥリ定額の提示、開市をめぐる交渉などから明らかなように、朝鮮との関係を自国優位なものに改変したいというホンタイジの意向は容易に達成されないまま丙子の乱を迎えたのであった。

以上のようにみてくると、後金（清）に対して仁祖と西人政権が取った対応を殊更に失当であったといわなければならない必然性は、どこにもないように思われる。文書行政さえ前提としない相手に対し礼物問題では妥協し、開市問題では拒否の姿勢を鮮明に打ち出し、侵略を可能な限り回避する努力がなされたといえる。明との冊封関係を前提とした後金との兄弟関係という名分も、朝鮮に対して明との講和の仲介が依頼された仁祖 12 年頃までは朝鮮に優位に働いたといえる。朝鮮にとって誤算があったとすれば、多くのモンゴルおよび漢人勢力が投降し、その体制も不安定にみえた後金が、諸矛盾を抱え込んだまま清というより大きなまとまりへと発展したことであった。清の成立は、江華盟約の反故を可能にして丙子の乱を引き起こす結果となり、朝清関係の成立へと至ったと考えられる。

むしろ重要なのは丁卯・丙子の乱の戦間期に当たる激動の十年間のなかで、歳貢（歳幣）や開市といった後の朝清関係の基本的な制度がかたちづくられていったことにある。丙子の乱における定約条年貢論に至って形式的には朝明関係の継承がうたわれるようにはなるが、清にとって冊封国の設定は必ずしも自明なことではなく、朝鮮との関係を構築するなかでそうした制度が形成されていったといえる。そうして成立した朝清関係は、壬辰の乱以降の朝明関係、朝鮮・後金関係、そして丙子の乱を経て清から新たに強制された関係という三つの要素が絡まりあって形成されていったと考えられるが、本論文ではこのうち特に朝鮮・後金関係の継承という要素について実態に即して提示するものとなったと考える。